

キリスト教教育と私 (5)

塩野和夫

5

(1)

1969（昭和44）年4月、同志社香里高校の2年生に進級するとすぐに生島吉造先生を校長室に訪ねた。まるで私の来室を予想していたかのように、先生は挨拶もそこそこに本論に入られた。「塩野君、教育には本物に優るものはない。同志社香里中学・高校で学ぶ生徒にはぜひ、本校で本物に触れてもらいたい。キリスト教が禁止されていた江戸時代に、密かに信仰を続けたキリシタンの人々がいた事実は知っていると思う。彼らの信仰に触れることができる何かを所蔵できないかと考えている¹⁾。」10分足らずで退室した時に、生島校長の教育方針をめぐる学内の混乱のため、しばらく校長室への訪問が憚られる事態になろうとは夢想だにしなかった。

2年C組の担任で倫理社会を教えられた木村先生と世界史を担当された清水先生は対照的な個性の持ち主だった。ギリシャ思想から初めて、世界の哲学を木村先生はゆったりと講義された。まず黒板に整然とその日の概要を板書され、教科書に基づいて講義される。確かにそれは教科書に従った内容であった。ところが、先生の口から言葉が出てくると、時と所を超えてまるでそこで哲学者が大切な真理を説いているかのように聞こえてくる。深い学識から語られる倫社であった。それに対して世界史の清水先生はまさに言葉の人であった。壇上から捲し立てるように浴びせかけられる講義は全体の概観よりも焦点を当てた事柄に集中していた。板書する際も時間を惜しむかのようにバ・バ・バ・バ・バと殴り書きである。そんな清水先生が時折ニヤッと笑

1) 江戸幕府によるキリスト教禁教政策下で信仰を続けたキリシタンを隠れキリシタン、あるいは潜伏キリシタンと呼ぶ。当局による弾圧を伝える資料としては禁教政策を告知した高札がある。潜伏期間の信仰を伝える資料としてはお掛け絵などがある。



世界史の清水睦夫先生

みを浮かべられると、その日の余談に入る。身を乗り出して聞きもらすまいとする生徒に向かって、先生はおもむろに話し出される。最も夢中にさせられた話の1つは中国の宦官が去勢される場面のリアルな描写であった²⁾。

5月に入ると、大阪府高等学校柔道私学大会があった。5人による団体戦で先鋒を務めた。相手はすべて体格に優る3年生で、いずれも厳しい試合となる。しかし力負けはせず、柔道場をいっぱいに使って互角に戦った。この日は左の背負い投げが有効で、それで一本取る試合もあった。足技で相手を崩してポイントを取り、抑え込んだこともあった。私学大会における最後の試合は激しい内容になった。開始早々に足技でポイントを取ったため、相手は猛然と反撃してくる。かろうじて最初のポイントで勝ったものの、左肘を痛めて曲げることもできなくなっていた。大会を終わってみる

2) 清水先生は中国史を教える時に、中国で朝廷の皇族に仕えるために去勢された男性について話された。だが、宦官は世界に広く存在した。聖書は使徒言行録第8章26-40節でエチオピアの宦官について語っている。

と団体戦は3位になっており、個人的には5戦全勝であった。6月には修道館で大阪府高等学校インターハイ柔道大会が、2日間にわたって行われた。1日目の土曜日が個人戦、2日目の日曜日は団体戦であった。土曜日の個人戦には軽量級で出場したが、左肘の怪我もあり「2回戦までにしておくように」との指示が出ていた。個人戦最初の相手は寝屋川高校の選手である。その頃、寝屋川高校の柔道部とはお互いの柔道場を使ってよく合同練習をしていた。それで長身で内またを得意技とすすでに2段を取っていた試合相手とは、手の内を知りあった練習仲間である。やりにくいと思ったが、試合が始まると相手は慎重に守りの姿勢を取った。そこで、長身選手の弱点を狙って足技で崩し背負い投げを掛けた。一本であった。2回戦にも勝ち、そこで左肘の怪我を理由に欠場した。日曜日の団体戦は5人戦で先鋒を務める。私学大会では初戦から厳しい試合で体力を消耗したので、この日は長く戦うことを目標に八分の力で試合をした。すると意外にも次々と一本勝ちを続けることができた。結果はインターハイ団体戦3位で、個人的には7戦を全勝した。

*

竹内寛君は枚方市中宮にある啓光学園中学校に入学した。これで竹内勤君と寛君に対する家庭教師としての責任は終わったと思った。ところが、お母さんから「もう1年、勤と寛の勉強を見てやってくれませんか？」と依頼される。どうしようかと迷ったが、これまでと同じ条件でさらに1年間引き受けることにした。その頃、香里教会で大学生による学習教室の計画が持ち上がっていた。大学生の清水さん・児玉さん・安達さんが、4月から礼拝堂で中学生に英語・国語・数学を教えるというのである。竹内兄弟には週に一度学習教室への参加を勧め、その日は柔道の練習後香里教会に向かった。竹内兄弟と一緒に彼らの家に帰り、勉強を見るためである。

勉強会が終わるまで少し時間があつたので、いつも中学生と高校生が礼拝をしている部屋で待っていた。そうすると、大里喜三牧師³⁾が帰って来られて2階の書斎に上がるとすぐに、先生のために用意されていたおやつと仕事道具を持って下りて来られ

3) 大里喜三 (1923-1970) 1953年に関西学院大学神学部神学研究科を修了する。在学中より開拓伝道に従事していた日本基督教団 香里教会牧師の主任教師に1951年に就任した。下記の遺稿がある。

「大里牧師説教と追憶」編集委員会編『み衣のふさー大里牧師説教と追憶ー』日本キリスト教団 香里教会、1971

た。先生は必ずおやつの半分を下さったので、一緒にいただく。ピーナツ菓子などが、すきっ腹にはとてもおいしかった。それからガリ版刷りの手伝いである。先生がローラーで刷り、私は刷られた紙を1枚づつ取っていった。30分間ほど手伝いながらいろいろ話をした。

ある日、先生は「塩野君はどう思いますか？」と前置きして話された。

先日、同志社香里高校のチャペルに招かれました。高校生にどんな話をすればいいのかを考え、何回も原稿を書き直しました。そんな風にして用意した話だったのですが、生徒たちはあまり聞いていませんでした。私に何が足りなかったのでしょうか。塩野君はどう思いますか？

しばらく後に先生は「私には悩みがあります。塩野君は私の悩みを聞いてくれますか？」と言って、正直に牧師としての悩みを話して下さった。

教会という所には問題を抱えた人がいろいろと訪ねて来ます。彼らの話はどこまでが本当のことが実はよく分かりません。たいていの人は本当のことを話していないと思います。それでも、お腹をすかせ困って訪ねて来た人を牧師としてそのまま追い返すわけにはいきません。それで食事を提供して話だけは聞くことにしています。ところが、長女はそれをよく思っていないのです。「お父さんだけ良い格好をして、…でもあの食事は我が家の晩ご飯なんですよ。それが急に無くなってお母さんがどんなに困っているか、お父さんだって知っているでしょう。」長女から注意されると「済まない！」と思う。それでも困っている人が訪ねて来ると、せめて食事だけでも出さないわけにいかない。これが私の大きな悩みです。塩野君はどう思いますか。

私は答えることができなかった。お嬢さんの反発にはお母さんを思いやる優しさにじみ出していた。来訪者への食事の提供には大里牧師の温かい人間性が思われた。だから、これはどちらが良いとか悪いという倫理的な判断を超えた事柄であろう。それよりもあの時、教会では見ることのなかった大里牧師の内面性を垣間見た思いがした。9か月ほど後にある雪山であの時に見た大里牧師の真実が私を新しい世界へと導き入れたのである⁴⁾。

生島校長の教育方針をめぐる生じた学内の混乱とは、高校2年生の1学期に起こったチャペル問題である。生島先生は「生徒の自主性」をとりわけ尊重された。無人の牛乳販売器は生徒の自主性を育てるために設けられた教育の場である。チャペルも先生にとっては生徒の自主性を育てるための重要な機会であった。そこで2年生の1学期早々のチャペルで先生は、「生徒諸君には自立の精神を持って、自らを律してチャペルには出席してほしい！」と要請された。その時、生徒の多くは校長の発言を当然の要望として聞いていた。ところが、「俺たちはチャペルに出席する自立の精神なんか持っていない！」と言い出し、公然とチャペルをさぼる生徒が出てきた。もちろん、先生がたは彼らを説得してチャペル出席を促された。ところが、校長の教育方針を盾に取り、教師に抵抗する生徒がいたと言う。

宗教部の大橋先生は生島校長を批判して、言われた。

生徒諸君は同志社香里高校の教育方針を了解して入学しました。だから入学する際に、香里高校の教育方針に従う契約をしたのです。その中の重要な要素にチャペルへの参加があります。ですから、学園は生徒諸君に対してチャペルへの強制的な出席を求めても良いのです。

1学期も後半に入ると、チャペルには前の数列にしか参加者がいない状態になった。生島校長はわずかなチャペル出席者に向かって、「諸君には自立の精神を持ってチャペルに出席してほしい！」と求められた。そんな6月中旬のある日、学校の中庭で校長から「塩野君！」と呼び止められた。「塩野君、塩野君に聞きたいことがある。校長室に来てくれないかね！」と言われた。

2か月ぶりに校長室を訪ねた。生島先生は早速本論に入り、自らの教育の精神を語られた。その上で、「塩野君は現在のチャペル問題をどう思うかね？」と尋ねられた。あの時、私は真直ぐに生島校長の顔を見つめて言った。「ぼくは生島先生の教育の精神を理解し、チャペルへの方針を支持します。」生島校長は大きく見開いた眼で頷きながら、「そうかね、そうかね」と繰り返されていた。しかし、私の目に映った校長の顔は苦悩に歪んでいた。

4) 参照、塩野和夫「はくの青春」(『問う私、問われている私』8-34頁)

教育とは所詮、一つの魂が一つの心を揺さぶり動かすことに他ならない。

生島校長の言葉である。私たちのために苦悩する生島先生の歪んだ顔を目の前にした時、私の心は激しく揺さぶられずにおれなかった。生島校長の魂が激しく私の心を揺さぶり動かしていた瞬間である。なお、2学期に入るとチャペルは元の強制出席に戻っていた⁵⁾。

(2)

夏休みに入って1週間程経つと、金沢へ柔道部の合宿に行った。2年ぶりであったが、清々しい空気を体は覚えていた。胸一杯に新鮮な空気を吸うと、「また、金沢へ来たんだ」と思った。寺町にある2年前と同じ寺院を宿舎とし、同じ鮮魚店の2階で食事をした。金沢の魚はやはりおいしかった。

合宿中は兼六園の隣にある県立体育館で午前中は機動隊の方々の胸を借り、午後は市内の高校を回って練習試合と合同練習をした。合宿中一度も練習を休まなかったが、左肘には湿布をした上に包帯を巻いていた。5月の私学大会で受けた傷が治っていなかったからである。

左の背負い投げを得意技とし左半身を前にして構えたので、どうしても左側の足や腰、手などに怪我をした。なかでも左肘の怪我は繰り返し痛めていた。けれども、怪我をしていない柔道部員はいなかった。皆どこかを怪我している。それでも、痛さに耐えて練習したのである。

私も左肘の怪我に耐えて練習を続けていた。

*

8月上旬に香里教会の教会学校夏期修養会で和歌山県の加太へ行った。紀ノ川の河口から海岸沿いに北西へ10キロメートルほどの所にある加太は、砂浜が広がる海水浴場で大きな海の家がいくつもあった。少し沖には友ヶ島もあった。

総勢50名ほどの参加者は2年前に淡路島の塩屋で行った修養会より一回り大きくなっていた。中西先生と同世代と思われ天満教会から転会して来られた内本先生はこ

5) 参照、塩野和夫「忘れえぬ師」(『一人の人間に』59-60頁)

の修養会に初めて参加された。彼はこれまでの先生方とはひと味違った庶民的な個性の持ち主のように見えた。大学2年生の池田さんもこの修養会から教師として参加されたと思う。関西学院大学神学部の野村さんが話をされた。それは明快な結論に至るものではなく、自分を問いかけるような内容であった。後に池田さんから「学生運動の影響があの話にはあった」と聞かされ、「そうだったのか」と納得した。野村神学生は誠実な人だった。

参加者が増えて多彩になり修養会の雰囲気も変わる中で、大里牧師だけはちっとも変わらないように思われた。礼拝の時は落ち着いた様子で臨まれ、海などで遊ぼうものなら先頭を切って飛び込んでおられた。しかし、勉強会の傍らで手伝いをした時に、先生はご自身の健康問題で何度か言っておられた。「私は体に爆弾を抱えているのですよ」と。そんな風に聞いていただけに、「大里先生、大丈夫かな？」と一抹の不安を覚えながら先生の様子を見ていた。

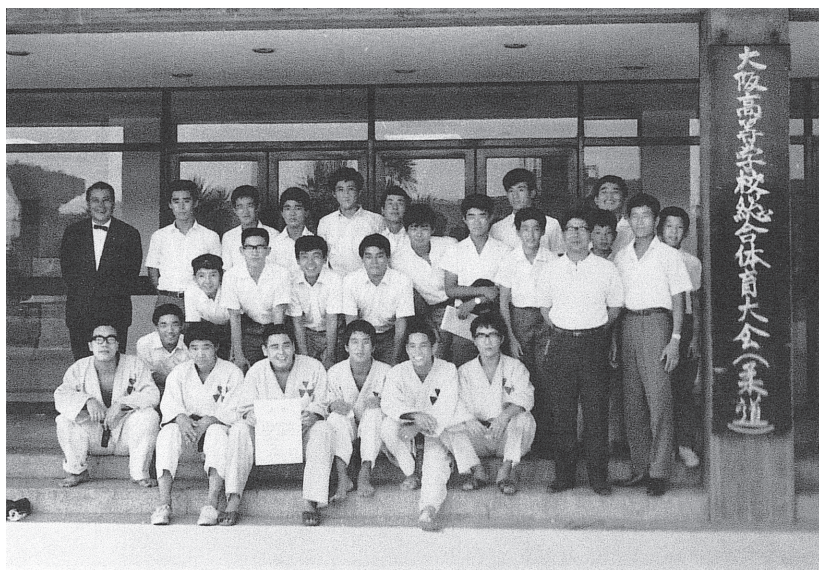
*

8月最後の土曜日と日曜日に大阪府高等学校国体予選柔道大会が大阪市立中央体育館であった。土曜日は個人戦、日曜日が団体戦だった。個人戦には軽量級で出場し、2回戦まで勝つと左肘の怪我を理由に3回戦は欠場した。

日曜日の5人による団体戦では先鋒を務めたが、2階席を見て驚いた。同志社香里高校応援団が校旗を掲げて応援しているのである。体育館内で声を出すことを禁止されていたのでエールは送らずに、彼らは校旗を掲げて試合を見まもり応援してくれた。6月のインターハイ予選団体戦で3位だったので、期待して駆け付けてくれたのであろう。試合は順調に勝ち進みベスト8になったところで、先鋒を西村先輩と交替した。左肘の痛みで試合を続行できなかったためである。代わった後も勝ち進み、遂に浪商との決勝戦に臨んだ。惜しくも浪商に敗れたが、国体予選の団体戦は大阪府2位であり、個人的には5戦全勝であった。

3年生の先輩は8月末に引退された。彼らの道場における最後の練習後に、私は先輩に向けて自分の決意を力強く宣言した。「来年は個人戦も団体戦も大阪府で優勝します。」あの時は1年後の優勝を固く信じていた。

*



国体予選後の集合写真 前列に並ぶ選手の右から二人目が塩野

中央体育館での表彰式を終えると、道着を後輩に預けて京都駅へ急いだ。修学旅行に参加するためである。高校2年生の人数が多すぎたので、旅行はクラスによって先発グループと後発グループに分かれた。2年C組は先発グループですでに出発している。それで後発グループの2年G組に入れてもらい、修学旅行に参加した。

新幹線に乗ると、試合の疲れがどっと出てきた。東京駅で乗り換えたことも全く記憶にない。気が付いた時は盛岡駅からバスで十和田湖を目指していた。8月下旬だというのに、奥入瀬渓谷の木々は紅葉を始めている。十和田湖に着くと湖畔を散歩した。船着き場には檻に入れられた小さなツキノワグマがいて、牛乳瓶を抱えて立ち、飲んでいる様子がかわいらしい。湖畔に立つ高村光太郎の女性像は凛々しかった。旅館での夕食のメインはマスの鍋だった。あの食事で体はポカポカと温まり、疲れがとれて不思議と元気を回復した。

十和田湖からは観光バスで南に向かった。2年G組の半数はバスの中で寝ているように見えた。私は起きて、バスガイドの説明を聞いていた。小岩井農場では広大な牧場が広がっていて、大阪近辺では見たことのない眺めを作っている。中尊寺は長い

歴史によってすっかり自然に溶け込んでいる建築物のように見えた。ボートを少し大きくした小型船で遊覧した松島湾は風と波が作り出した景観の中に瑞巖寺の建物がある。蔵王のお釜は澄み切った青い水をたたえていた。猪苗代湖の北にある五色沼は池によって赤・緑・藍などの色をしていて、不思議な美しさであった。

修学旅行で回った東北地方は何よりも透き通った美しい自然—山も湖も木々も海もそうだった—が、強く印象に残った。そこで出会った人たちも豊かな自然のなかでゆったりと生活しておられるように思えた。

(3)

2学期に入るとキリスト教への失望が膨らんできた。中学3年生の6月以来、香里教会には試験中も休むことなく通い続けていた。聖書も読んだ。キリスト教に関する本も読んでいる。しかし、キリスト教からは最初の問い「死に向かって生きている人間」に対する実存的で根本的な語りかけはなかった。教会で聞いたメッセージはどれも倫理的なレベルの話のように思えた。そんな話ではなく、命そのものに触れる話を聞きたかった。「キリスト教もやはり駄目だったか!？」という失望感を抱きながら、それでも教会には通い続けていた。

2年C組の担任であった木村先生には率直に教会への失望を打ち明けた。静かに私の悩みを聞いて下さった先生の答えはこうであった。

塩野！キルケゴール⁶⁾の『おそれとおののき』を読め。白水社からキルケゴールのシリーズが出ている⁷⁾。それがいいだろう。塩野の疑問にキルケゴールが応えてくれることを期待している。

6) キルケゴール (1813-55) 木村先生が倫社で講義されたキルケゴールはおよそ次の様な内容であった。「ヘーゲルが弁証法を用いて歴史全般を解釈したのに対して、キルケゴールは人間の実存を問題にした。彼によると、人間は美的段階から倫理的段階へ、さらに宗教的段階へと弁証法的に歩む。」

7) 白水社はキルケゴール著作集を1962年から68年にかけて出版している。『おそれとおののき』は1962年に第5冊目として出版された著作集の中に収録されていた。

早速、キルケゴールの『おそれとおののき』を読んだ。それは創世記に記されているアブラハムがイサクを捧げる場面を克明に記していた。いや、克明にというよりもキルケゴールの宗教思想が雄弁にアブラハムの物語を用いて語られていた。彼によると、宗教的な判断と行動は時として倫理的なレベルを超える。だから、倫理的な立場では理解しようのない判断と行動が宗教的な世界には生じる。このような宗教に対するキルケゴールの考え方は、しかし、私の問いに答えるものではなかった。

*

生島先生にもキリスト教に対する行き詰まりを正直に打ち明けた。しばらく私の話に耳を傾けて下さった先生は、聞き終えると御自身の経験を話して下さった。

塩野君、私が同志社大学の学生だった頃は海老名先生が総長だった⁸⁾。ある時、青年としての悩みを抱えた私は有終館の総長室に海老名先生を訪ね、悩みを打ち明けた。すべてを聞いて下さった先生は私が話し終わると、「生島君、御所を散歩しよう！」と誘って下さった。そして、海老名先生と一緒に御所を散歩した。しばらく散歩していると、先生はこう論じて下さった。「生島君、悩みが深刻だからといって、歩くことを止めてはいけない。悩みながらも歩く。歩きながら悩む。そのようにして歩き続けていると、いつの日か生島君は悩みを越えているものだ。」

あの時、海老名先生のおっしゃることは「本当にそうだ」と思えた。海老名先生の言葉で私は救われて、悩みの向こうにかすかな希望を見ることができた。

今の塩野君にはこの話を贈る。

生島先生の若い日の経験談は心に染みだ。キリスト教を悩みながらも、「今は歩き続けていればよいのだ」と思えた。

*

10月も下旬になったある日の夕暮れ時、柔道の練習を終えた私は珍しく一人で帰途を急いでいた。美井元町から美井町を過ぎ、間もなく車の多い府道21号線に入ろうと

8) 海老名弾正（1856—1937）熊本バンド出身者として同志社英学校で学んだ後、各地の組合教会で活躍した。1920—28年に同志社総長を務めている。



帰宅途中の佐々木花子さん

する坂道で、前を歩いていた女性を追い越そうとした。後ろから見ても彼女はずいぶん疲れているようだった。追い越そうとした瞬間になぜか女性と目が合った。彼女は佐々木花子さんといい、同志社香里の広い校舎を一人で清掃している方だった⁹⁾。

視線が合うと、「アンタ！」と花子さんは声をかけて来られた。続いて道の真ん中で話し出された。

花子さん：アンタ、広い校舎を毎日一人で掃除して回るのはしんどいで。それに悪い生徒もおるしな。それでも、なんでしんどい仕事を続けているか、アンタ分かるか。

いきなり話しかけられて返答に口ごもる私に、その日花子さんは雄弁だった。

9) 参照、塩野和夫「同志社香里の花子さん」(『一人の人間に』22-23頁)

花子さん：それはなあ、この学校からエライ人が出てきてほしいと思うからや。そ
ゃから、毎日頑張って掃除して回っているんや。

思いがけない言葉を聞いて、私は思わず心から花子さんに話しかけていた。

塩野：おばちゃん、ありがとう。おばちゃんが掃除してくれている校舎で勉強でき
て、僕ら幸せや。

花子さん：おおきに、そんなに言ってもらえたら、うれしいわ。

と答えた花子さんはその時、ハンドバックから聖書を取り出して言われた。

花子さん：アンタ、これ貰ってくれへんか。

塩野：ありがとう。でも僕も学校で聖書を勉強してるから、持つてる。おばちゃん
の聖書、大事にしてや。

花子さん：そうか。アンタ、頑張ってや。

それは、6年間同志社香里中学校・高等学校でお世話になった佐々木花子さんとの
たった1度、5分間ほどの会話である。しかし、あの時花子さんの真実に深く触れて
いた。彼女の真実に触れて以来、花子さんに掃除されている校舎が尊く見えた。

*

12月に入ってすぐの日曜日の夕方、大原先生の新居で高校生会クリスマスを開いた。
その頃、香里園桜木町の高台にあったアパートから大原先生のご家族は一戸立ちの家
に引っ越されていた。香里園駅から京都方面へ向って次の駅である光善寺駅で下車し、
淀川の方向に歩くと500メートル程の所に新居はあった。いつものように皆でサンド
イッチの用意をすると、まず礼拝である。珍しくご一緒くださった大里牧師がメッ
セージを語って下さった。聖書は『旧約聖書』の「伝道の書」第11章1節である。

あなたのパンを水の上に投げよ、
多くの日の後、
あなたはそれを得るからである。

聖書を読むと、大里先生はこのように語って下さった。

伝道の書には「あなたのパンを水の上に投げよ、」とあります。パンはその日1日を生きるために必要な食事です。しかし、若い日にはこの大切なパンを「水の上に投げよ」と言います。これはどういう意味でしょうか。

私の様な年になると、仕事一杯あります。「あれをしたい」、「これをしたい」と思っても、できません。仕事がありますし、家族への責任があるからです。

けれども、若い日は違います。若い日には皆さんを束縛する仕事はありません。家族への責任もありません。だから、若い日には本当にしたいことをしたら良いのではないのでしょうか。「水の上にパンを投げる」とはそういう意味だと私は考えます。しかも、聖書は「水の上に投げたパン」は「多くの日の後」、皆さんのもとに返ってくると言っています。

どうぞ、皆さんは水の上にパンを投げるような豊かな青春の日々を過ごして下さい。

大里牧師がなぜクリスマスにあのようなメッセージを語られたのかは誰にも分からない。しかし、高校生一同は真剣に先生の話に耳を傾けていた。

*

12月25日の午前中に大里牧師の引率により香里教会の有志10数名と共に初めてK女学院を訪ねた。クリスマスと共に祝うためである。

扉で仕切られた女学院に入ってすぐ右に行くくと集会室があった。そこでガウンを付け手に蜀台を持つと、聖歌隊の準備が整う。用意ができると、2列に並んで会場の講堂まで行進する。その時目にした光景にショックを受け、それは心に焼き付いて離れない。学院生の宿舎には戸にも窓にも鉄格子がはめられていた。K女学院は未成年で社会的な罪を犯した女子のための矯正施設だったからである。

クリスマス祝会は2部構成で、1部のクリスマス礼拝では聖歌隊が讃美歌を歌い、大里牧師がメッセージを語られた。2部は学院生の出し物で、その中に演劇「夕鶴」があった。舞台の大道具・小道具を初め出演者の衣装も本格的で、何よりよひょうとつうが演じる夕鶴は素晴らしい出来栄だった。いつしか香里教会の有志などわずかな観衆は芝居の世界に引き込まれていた。出演者と観客が一体となった講堂で、観客は出演者の純粋な心を感じていた。鉄格子の中でのメリークリスマス、そこには心を通わせ共感し合う豊かな世界が確かにあった。

クリスマス祝会を終えると、香里教会有志は集会室で学院生の教育指導にあたっておられる女性から近況を伺った。そこで、多くの学院生は家庭崩壊・暴力団の誘いかけ・覚醒剤の使用・売春などの経験があると聞いた。

K女学院を後にする時、彼女たちの現実を神に問いつつ、あの純粋な心が守り育てられるようにと祈らざるを得なかった。

(4)

3学期に入ると、体育の授業はグラウンドにおけるサッカーであった。小学校高学年の時、サッカーの指導者から「ボールに向かって猛然と突っ込み、ボールを蹴る姿勢が良い」と皆の前で褒められた事がある。あの日からサッカーといえば、脇目もふらず誰よりも早くボールに到達するものだと思っていた。

あの日の授業でもボール目がけて全力で走り、時にヘディングし時にボールを蹴っていた。そんな時、転がっているボールに着くと左足で捉え右足で蹴ろうとした。その瞬間左足がボールに乗ってしまい、そのままバランスを崩して転倒した。ボキキと足首が悲鳴を上げた。しばらく起きることもできなかった。ようやく立ち上がると、左足首が痛くて歩けない。仕方がないので体育の授業が終わってから、友人2人に両肩を支えてもらって、柔道部の部室に引き上げた。途中、体育館のピロティにほど良い長さの角材があったので、それを拾ってきてもらい杖にした。

柔道の練習は1週間だけ休んだ。枚方市駅近くにある小田原整骨院に行くと、「これは重複捻挫です」という診断である。たった一度の怪我なのに、左足首を何度も繰り返し捻挫したものと判断されてしまった。

1週間後、不安を感じながら柔道の練習を再開した。左足首の回復を待つためには無理をしない方がよいことは分かっていた。しかし、5月には大阪府の私立学校柔道大会があり、6月にはインターハイがある。1月といえど、練習を休むわけにはいかなかった。

柔道着に着替えて道場に立つと、左足首がうずく。回復というには程遠い状態である。それでも、寝技では自然と体が動いた。「これなら、いけるかもしれない。」寝技をしながら大会出場へのわずかな可能性を感じた。いよいよ立ち技の練習である。左足首をかばうため予想した以上に体の動きがぎこちなく悪い。大事を取って得意の左の背負い投げを掛けることもできない。タイミングを見計らって、右足で体を支えながら左足で小技をかけて相手を崩すのが精一杯である。同志社大学から指導に来て下さった松浦先輩が私の状態を見て、教えて下さった。

塩野、巴投げを覚えろ。

巴投げで相手を崩して、寝技に持ち込め！

このようにアドバイスして下さった松浦先輩は実際にさまざまな角度からの巴投げを見せて下さった。その日から巴投げを練習した。正面からの巴投げ、左右両側からの巴投げ、それに正面と見せかけて左から入る巴投げなどである。しかし、新しい技を乱取りで有効に使うことは難しかった。あせって思わず仕掛けた左からの背負い投げで、1月下旬には左足首を再び負傷した。痛くて歩くこともできない。この時、5月と6月に予定されている大会出場は断念した。

*

怪我に凝りたので2月と3月は本格的な練習は避けて、軽いトレーニングを続けて左足首の回復を待った。その頃、中沢のお兄ちゃんからスキーができるので遊びに来るようにと誘いがあった。それで柔道部の仲間からスキーの板を3,000円で譲り受け、スキー靴はミズノで15,000円出して買った。春休みに入る。夏の大会に備えるために、これ以上練習を遅らせるわけにはいかなかった。雪山で本格的なトレーニングを始め、スキーも楽しむことにした。

中沢のお兄ちゃんは岐阜県神岡町にある三井金属鉱業神岡鉱山に勤務していた。母

親が「これをお兄ちゃんへの手土産に」と持たせてくれたのは、サントリーのウィスキー・オールドであった。スキー用の服装を整え、大きなバックパックに一杯の荷物をつめて家を出たのは3月23日である。大阪から北陸本線で富山まで行き、高山本線に乗り換えた。途中で列車には通学に行き来する地元の高校生が乗り降りしている。彼らはとても素朴な人たちのように見えた。富山県と岐阜県の県境にある猪谷駅で降りると、中沢のお兄ちゃんが待っていてくれた。そこからタクシーに乗って山の斜面を削って作られた小さな道を通ってどんどん登っていった。ようやく到着した神岡鉦山はいくつもの山に囲まれ、大きな山の傾斜地に這いつくばるように多くの住宅が並んでいた。

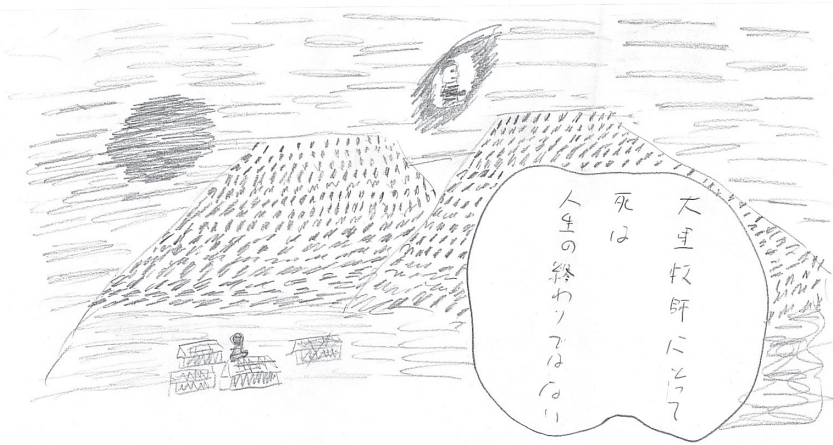
神岡鉦山の若い社員の方や食堂のお姉さんとはその日のうちに親しくなった。神岡鉦山が所有しているスキー場への行き方やスキーの楽しみ方、休憩場所になる山小屋の場所など教えてもらった。翌日朝食を終えると、服装を整えスキーを担いで一人で山小屋を目指し登り始めた。どこまで深いのか分からない雪に足は膝までずりずりと埋まった。歩くうちに左足首が痛み出す。それでも「痛くない。痛くない」と言い聞かせて、雪道を登っていった。

山小屋に着くと、まず1時間ほど念入りにトレーニングをした。それから山小屋の前にあるゲレンデでスキーをした。スキーは小学校6年生の時、滋賀県マキノのスキー場で滑って以来である。それでも新雪が積もったゲレンデを思うままに滑るのは楽しかった。何回か滑っては自力で登っていると、またたく間に予定の時間である。山の空気はおいしく、雪化粧した山々の眺めは素晴らしかった。

*

神岡鉦山でトレーニングを初めて3日目の3月25日は午後からしんと雪が降り続いた。夕方に雪で分かりにくくなった道をようやくの思いで帰り、食堂でくつろいでいた時である。思いがけない電報が母親から来た。「オオザトボクシシス。スグカエレ」と電文にあった¹⁰⁾。「ええっ、まさか？」と信じられなかったが、事情を説明して食堂にいた人たちに「この雪の中、明日帰ることはできるのでしょうか」と聞いた。彼らの返事は「いや、この時期にこれだけの雪が降ると雪崩の危険があって、車

10) 大里喜三牧師は、1970(昭和45)年3月24日に死去された。前夜式は3月25日夜、告別式は3月26日の午後に執行された。



神岡鉱山で見た大里牧師の幻

は出ません」という返事であった。遅くに帰ってきた中沢のお兄ちゃんからは「明日はスキー場には行けないだろうから、この辺りの家の雪下ろしでも手伝うように」と指示された。

宿舎の近くに保育所があった。それで翌日は宿舎と保育所の屋根に上り、雪下ろしを手伝った。屋根に上がってみると、周辺の山々がその全体像を見せている。大きな山々が幾重にも重なりあっていた。しかし、雪下ろしをしていた時も周辺の山々を眺めていた時も、心を占めていたのはただただ大里先生である。「大里先生が亡くなられた。大里先生が亡くなられた。」それ以外に、心に浮かぶ言葉はなかった。そのようにして茫然と雪山を眺めていた夕方である。夕焼けに輝く雪山に沿って大里牧師が天に上っていかれる様子が思われた。その幻に「ああ、大里先生は天国に上って行かれるのだ！」とぼんやりと思い描いていた。その時に全く予想もしなかった考えが心に浮かんできた。

大里牧師にとって死は人生の終わりではない。

罪の力も大里牧師の人生を破壊することはできないからである。

大里牧師にとって死とは人生の完成である。

先生は自分の弱さにあくまでも正直に生きられた。

神の恵みが先生を生かしたからである。

大里先生を生かした神の恵みは、死によって先生の人生を完成させる。

このような考えが心に浮かんだ時に、大里先生の死を通して遂に出会っていた。それは大里先生を生かした真実であり、人を生かす命である。この真実こそ長く求めて止まなかった「人間の死と生から生じる問い」に対する答えであり、死に向かう人間を生かす命であった。